瞳子の日常

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瞳子の日常

【Ｎコード】
Ｎ０２７６Ｙ

【作者名】
七崎　雨

【あらすじ】
私のうちには、変な絵がある。といっても変なのは見た目じゃなくて……『瞳子ー！オレを鑑賞しろー！』――うちの絵画、しゃべるんです……。ナルシスト病んでるっぽい絵画と、女子高生瞳子の短編連作。※拍手お礼小説のまとめです。

宿題（前書き）

※ノリだけでできています！

宿題

私の家には、変な絵がある。
『おい瞳子、ちょっと小一時間オレ様の観賞をしろ！そして褒め称えろ！』
壁に掛けられた綺麗な絵が、いつものようにそうわめいた。――言っておくけど、私の頭がおかしくなったわけじゃない。
「い・や！あたし宿題するんだもん！３秒で我慢して！」
『なんでだよ！？見ろこの美しい情景、鮮やかな色合いを！すばらしいコバルトブルーじゃないか！ああ、さすがオレ！』
たしかにフランス帰りのこの絵画は、輝きながら息をしているような青い海と、まあるい月の浮かんだ夜空がとても幻想的だ。私は絵についてはよくわからないけれど、初めてこの絵を見た時にはその青の美しさに思わず息をのんだ。――いきなり話し始めた時には、思いっきり叫び声を上げたけれど……。
こんなに神秘的な絵なのに、どうしたらそんな性格になったんだろうか。人は見た目によらないって言うけど、それって絵にもあてはまるのかな？
『嫌だー！瞳子、オレを見ろ！オレだけを見てくれぇぇ！』
「あーもう、昨日ちゃんと見たでしょ！わがまま！」
今日も今日とて、絵画は粘着彼氏みたいな発言をしてくる。彼は何しろ人に見られるのが大好きで、常に誰かに見つめられ、褒められていたいというどことなく病んだやつなのだ。多分彼は全人類が一生自分のことだけ見て生きていけばいいと思っている。ならいっそ美術館にでも行けと思うけど、母親が一目惚れして買ったかなり高価な絵らしいし、帰ってきた母親に『ああ、今日も素敵な青色！最高だわ！』と褒め称えられるのを彼も楽しみにしているようなので、取りあえずそのままにしている。
『オレの青の美しさは、シャガールをも超えるぞ！お前は恵まれた

環境にいるんだ！もっとオレを褒めろ！』
「絵画、怒られるよ……」
シャガールの青を見たことはないけれど（見てみたいなー、とか言ったらうちの絵画はどんな顔するんだろ）、そんな簡単に芸術を貶してはいけないとおもいまーす。
「さて、宿題でもやるとしますかねー」
『いやだ、瞳子、とうこぉぉぉ！』
絵画の叫び声。これに絆されてはいけない。前に、あんまり悲しい声を出すので戻ってやったら3時間ほど観賞させられたことがあった。
『とーこー！とうこー！』
……。ほだされては、いけない。
「――はやく、宿題おわらせちゃおう……」
子供のように私を呼ぶ声を背に、私は自分の部屋のドアを開いたのだった。

ホットケーキ

「うん、我ながらおいしい」
私は自分で作ったホットケーキをぱくりと頬張った。
ホットケーキごときで作るとか言っちゃいけないかもしれないけど、私の主食はホットケーキだ。ホットケーキさえあれば生きていける。科学の限界も超えてやるぞ！
『なー瞳子、それうまいのか？』
「うん、世界で1番おいしいよ」
『オレが見たことある料理の中では3番目くらいにまずそうだぞ』
「わかってないねー。ホットケーキは全ての食材にマッチするの。はちみつとかお好みソースはもちろん、ハム、チーズ、肉じゃが、納豆に漬けものだって最高の味にしてくれるんだよ？」
『そうだったのか！知らなかった、いつか食べてみたいものリストに追加しておこう』
「え？絵画ごはん食べたいの？」
私はもごもごマグロのお刺身を頬張って聞くと、絵画は『まーな』とそっけなく答えた。
絵画はもちろん絵画なので、食べたり飲んだりはできない。どこまで感覚があるのかはちょっとわからないけど、とりあえず視覚と嗅覚はあるみたいだ。
「そっか」
……なんだかちょっと絵画が可哀そうに思えてきた。絵画がごはん食べるなんておかしいことだけど、そりゃあ目の前で毎日こんなおいしそうなもの食べられたらそう思っちゃうよね……。
「絵画……」
私が視線をやると、絵画は我慢しきれないというように息を吸って……
『だあぁぁ！そんなことはいいから、さっさとオレを観賞してくれ

！瞳子はなんでオレ様みたいな素晴らしい絵の横でそんなくだらない行為をしてられるんだ！？もっとオレを褒めろ！食い物なんていつでも食えるだろ！』

――え？くだらないこうい？

『この瞬間のオレは、今しか見れないんだぞ！一瞬一瞬オレは変化していくんだ！四六時中見ていろ！そして褒めろ！』

それが世界の真理だ！とばかりに言い放った絵画。

――同情して損した。……人の思いを、ホットケーキを、一体なんだと思っているんだ！

私は席を立って、それから……

「……よいしょ」

『おい瞳子、何を、うわ、やめろー！ううぇあ！』

絵画を壁から外すと、床に置いた。うつ伏せ（？）に。

『つめたい、つめたいぞ瞳子ー！』

「あ、温度感覚あったんだ」

私は再びソファに戻って、ホットケーキをぱくっと口に入れる。

うん、おいひい。

『とーこー、暗い、見えないー！とーこぉぉ！』

「……食べ終わるまでがまんしなさい」

ホットケーキを侮辱するものは許さないぞ！子供みたいにみーみー言い始めた絵画を無視して、私は食事を続けるのだった。

ホットケーキ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
こんなかんじでだらだらしたり、ときどき新しい子たちもでるかもしれません。
あとこのページ、目がちかちかしないでしょうか……？
もし見にくいとかあれば（もちろんなにもなくても）、コメントいただけると嬉しいです。
拍手に新しいお話をあげたので、よろしければそちらも……（さくしゃがこっちをみているぞ！）

ねこ

『なあ瞳子ー、こいつらは何故こんなにドロドロドロドロしているんだ？』

夜、今流行っている恋愛ドラマを観ていると、絵画が不思議そうな声で言った。

「恋愛ってこういうものだからだよ。女の嫉妬は怖いって言うでしょ？」

私はそう言ってじっと画面に見入る。しかしヒロインが、自分の恋人と親友のらぶらぶシーンを目撃したところで、エンドロールに入ってしまった。続きはまた来週。

「あー、ほんっとに焦らすよねー。こっちの方がやきもきしちゃうよ」

私はそう言って、机の上の蜜柑を食べる。この前青りんごを絵画の前で食べようとしたら、『オレはそんな色を青とは認めない！』と大騒ぎしてうるさかった。緑でも青信号だし、昔は緑も青って言ってたんだよ、と言っても絵画は『意味がわからん！青は青だ！』とまったく聞きいれる様子がなかった。本当に面倒な絵画である。

私はＣＭを眺めながら、ぱくりと蜜柑を口に入れる。

オレンジ色の蜜柑はよく熟れていておいしい。ちなみにすじは面倒にならない程度には取るけれど、別に付いていても気にはしない。付いてた方が栄養あるって聞いたけど、本当かな。

『ほー……そういうものか。オレには理解できないな』

「まあ私もさっぱりしてる方が好きだよ。昼ドラとか大変なことになってるときあるしね。あ、でも『この泥棒猫ー！』っていうのは１回くらい言ってみたいかも」

でもやっぱりそんな展開になったらめんどくさいかなー。うーん、やっぱりいいや。お前はもう死んでいる！とかは現実にあったらホラーだし……月に代わってお仕置きよ！とかがいいかな？そういえ

ば今の美少女ものって素手で戦ったりすることあるよね。パンチとかキックとか。やっぱり手ぶらの相手に道具はダメってことなのかな？ただでさえ敵1人対大勢とかあるし……まあどうでもいっか。

『瞳子、まさか……あのぐにゃっとして毛の生えただけの、にゃーにゃーうるさい奴らが好きなのか……？』

なんかゴから始まってリで終わる、黒光りするアレみたいな言い方するな……。

「そう言う意味のセリフじゃないんだけど……まあ好きだよ、猫。可愛いし」

私が言うと、絵画はくわっと顔色を変え（たぶん人間だったら、という比喩表現だけど）て、『そんなバカげた話があるか！』と大声を出した。

「あいつらがかわいいだと！？とんでもない、あんな下劣な下等生物ども！」

「……ねこちゃんバカにするんじゃありません！――で、一体何されたの？」

絵画は基本的に自分のことしか興味がないので、特別何かを好きになったり嫌いになったりすることが少ないと思う。この取り乱しようは、きっと何かあったに違いない。

絵画はうおぉぉ、と唸ってから、心底思い出したくないとでも言うように重々しく言った。

『あいつらは……オレのこの高貴なる身体に……ま、マーキングを……！』

あ、なんかわかった。

「……絵画、ちょっとお風呂場に……」

『未遂だ！かなり昔のことだしな、しかしあいつらときたら、ぐぬぬぬ……』

相当なトラウマになっているらしい。気持ちは分からなくもないけど……いやでも、私はやっぱりねこちゃんが好きだ！

「――きっとほら、猫もさ、絵画が綺麗だからマーキングしたくな

っちゃったんじゃないかな……？」
苦笑いの末に私は優しさを込めて、絵画にそう言った。絵画は少しの沈黙の後、
『お、おお、なるほどな！あいつらもなかなかわかっているじゃないか！よし、もうこわくない、こわくないぞー！』
絵画はそう言ってまた、『とーこ、オレのどこら辺がどうきれいか具体的にいってみろ！』とかふんぞり返ったけれど、次の瞬間テレビに映った猫を見て、『ぎゃ！』と声を上げていた。
「……絵画、絵画はねー、まずこの海がすっごくいいと思うの。神秘的なのに、それでいてお母さんみたいにあったかいかんじがするよね。あと私はこの黄色い、とろけそうな、ホットケーキのバターみたいな月も綺麗だと思うなあ」
『お、おお、わかるか瞳子ー！さすがオレの所有者の娘だ！』
もっと褒めろとふんぞり返る絵画に、私は空が綺麗とか、やっぱり青色がいいとか、いつもの倍くらい丁寧に絵画を褒める。
『ふふん、さすがオレ、あのぐにゃぐにゃどもにもこの美しさを悟らせてしまったんだな！』
満足そうに笑う絵画を見て、私は引き攣った笑いを浮かべた。
――明日知人のねこちゃんあずかるの、絵画にはまだ黙っておこうかな……。

ねこ（後書き）

拍手お礼なのにローテーション早いよ！と思いながらも、なぜか書きたくなってしまったので更新です。このように今後も気まぐれに更新したり停滞したりすると思われます。
拍手も更新しました！よろしければそちらもどうぞ。そして感想や突っ込みなどをいただけるととてもうれしいです。
読んでくださってありがとうございました！

いとこ1

「夏目ちゃん、いらっしゃーい！さ、入って入って！」
「久しぶり、瞳子。元気そうね」
今日はいとこの夏目ちゃんが遊びに来てくれた。夏目ちゃんは私と同い年の女の子だ。今は遠くの学校に通っているからあんまり会えないけど、小さい頃はよく一緒に遊んだりしていた。
「おじゃまします。はい、これお土産」
「わー、ありがとう！……おばさん今度はカナダに行ったの？」
手渡されたのは、瓶入りの高級そうなメープルシロップ。前来た時にはたしか、フランスのマカロンだった気がするけど。
「ちょっと前まで。今はイギリスにいるって言ってたわ」
夏目ちゃんのお母さん、つまり私のお母さんのお姉さんは、いつも世界中を飛び回って仕事をしている。
「そっかー、おばさんも忙しそうだね」
「まあ、本人が楽しそうだから良いんじゃない？でも瞳子のところも大して変わらないでしょ」
「あはは、でもうちは夏目ちゃんとこほどではないよ」
私のお母さんも、夏目ちゃんのお母さんほどではないにしろ、絵画を買えちゃうくらいにはバリバリの仕事人間だ。夏目ちゃんも将来は出来る女になりそうだし、やっぱり血なのかな。……え、私？
――えへへ……。
「うれしいなー、こんなに高級そうなメープルシロップはじめて！」
「――あんた、まさかまだあのおかしな食生活続けてるわけ……？」
夏目ちゃんが眉を寄せて言う。
「失礼な、ホットケーキは最高の食べ物だよ！？それにちゃんと、おかずとして野菜も魚も食べてるから大丈夫！」
「――いや、それがおかしいと思うんだけど……まああんたがいいならいいわ」

夏目ちゃんは、一応栄養は摂ってるのよね……？と苦笑いを浮かべたけれど、その後は何も言わなかった。――よし、今日は夏目ちゃんにホットケーキの巣晴らしさを教えてあげよう。その瞬間私の中で、今日の献立が決まる。今日の夜ごはんは、豪華に手巻きホットケーキだ。あとでお刺身買わなきゃなー。

『夏目、よく来たな。お前も早くオレを見たくてたまらなかっただろう』

リビングに入ると絵画がふんぞり返ってそう言った。絵画の中では、世界中の人が絵画に日々焦がれていることになっているらしい。ほんと、こまった絵画だなぁ。

「あんたはほんと変わんないわねー」

『当たり前だろう、オレはもう完成品だ！これ以上美しくなることなんて不可能なんだぞ！』

私の記憶ではこの前、オレは一瞬ごとに変わるって言ってたように思えるんですが……。

「あー、はいはい」

夏目ちゃんは呆れたように、絵画を見て笑った。

夏目ちゃんは、絵画が話せることを知っている。

普通の人は絵画がいきなりしゃべりだしたらびっくりすると思うんだけど、夏目ちゃんは『あら、あなたしゃべれるの？』なんてなんでもなく受け入れていた。ちょっと聞いた話によるとどうやら夏目ちゃんは変わった体質らしくて、こういう変なものには慣れているらしい。――慣れるほど、変わったものがいるの……？見てみたいような、見たくないような……。

さあオレを観賞しろ、と威張る絵画に近寄って、私はぴっと指を立てる。

「絵画、夏目ちゃん疲れてるんだから後にしてね。夏目ちゃん座ってて、私お茶淹れるね。ホットケーキはメープルシロップ？それと

もチョコシロップ？」
「いや、そんなおかまいなく……」
夏目ちゃんったらなに今更遠慮してるの？全然気にすることないのに。
『疲れている時こそオレを観賞しろよ！どうだ、癒されるだろう夏目！』
「もう、疲れたらホットケーキに決まってるでしょ？夏目ちゃんはホットケーキを食べるの！」
むむむ、と絵画と睨みあう私。
「――あんたたち、実は結構似たもの同士よね……」
なにか夏目ちゃんの声がしたけど、その声は私と絵画の言いあう声にかき消されて、残念ながら私の耳までは届かなかったのでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0276y/

瞳子の日常

2011年11月24日22時48分発行